

造形表現を考える場としての作品展の実践と考察

Practice and Consideration for Exhibition which is Stimulated Thinking about Art Expression

立崎 博則* 木戸 永二** 佐貫 巧***
Hironori TACHIZAKI* Eiji KIDO** Takumi SANUKI***

*青森中央短期大学 幼児保育学科

*Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

**青森明の星短期大学 子ども福祉未来学科

**Child welfare department future, Aomori Akenohoshi Junior College

***八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科

*** Department of Early Childhood Education, Hachinohe Gakuin Junior College

Key words : 造形表現、作品展、ワークショップ

第1章 研究の動機 「造形表現を学ぶ/考える場としての作品展」

幼児美術・造形表現の分野では、「苦手意識」、「作品第一主義から児童中心主義」、「めざす造形とさぐる造形」、「保育所保育指針・幼稚園教育要領を踏まえた指導」、「鑑賞教育」など幼児の造形表現について様々な課題が日々研究されている。

しかし、実際の保育現場で保育者は、日々の保育の中で、全ての課題と向き合うことは難しい。また、実際に困っている点は、これらの研究の課題とも異なる。島田（2016）が保育士に造形活動を行う際の準備や活動中などの視点から項目を設定した質問紙による調査分析の中で、『保育者は、造形活動そのことよりも幼児の思いにかなった活動や指導や援助ができているのかという点について常に優先している』と分析している。このことから、現場の保育士からは指導法や援助についての解決案が望まれていると考えられる。

また、それらの悩みを解決するための時間を、保育士が日々の保育の中で十分に確保することは難しい、ということも現場の大きな課題の1つと言える。島田（2016）の研究でも『保育者がより幼児の思いに沿った保育を実践するためにも、造形活動に対する苦手や嫌いと言った意識を克服できるようにするためには教材研究が効果的だが、保育者の多忙さからその時間を毎回確保することは難しい。』とまとめられており、続けて、『したがって、研修を活用することが考えられる。』と続く。隅（2015）はある公立の図画工作科に研究指定校に指定されている小学校でのアンケートで20歳代と50歳代の教員の図画工作の教科観を探究した研究の中で、共同での授業研究について『共同で行う題材の施策を通じて材料用具の使い方について学ぶことができる。』や『共同で行う授業研究をきっかけ

にして、児童中心主義の教科観を持つようとしている。』などの意見から『(20代教員と50代教員、) 双方ともにこの教科(図画工作)の授業研究を行う点の良さをあげている。』とまとめている。このように小学校教員による授業研究や保育士の研修など、共同で行う研究や研修が、現場の困ったことに対して求められている解決手段ではないかと考えられる。

以上のことから本研究では、幼児の造形表現の大きな課題と、現場での困ったことを同時に解決する手段として、造形作品とワークショップを展示する展覧会を企画し、その効果を確認することを目的とした。

第2章 研究方法 「展示概要と調査方法について」

1) 展示概要

青森県保育士養成校3校(青森中央短期大学、青森明の星短期大学、八戸学院大学短期大学部)による造形作品展&ワークショップ おめめとおてて展 おめめちゃんとおててくんのごんぼホリデーを、八戸ポータルミュージアムはっち(平成30年10月7日)、青森県立美術館コミュニティホール(平成30年11月17,18日)に企画実施した。子ども達との造形活動で作った作品や普段の授業での学生作品、造形担当教員の作品のほか、造形ワークショップを展示期間中実施し、幅広く保育者や家庭に造形あそびや美術表現についての提案をすることで、地域の子どもや大人の表現力や感性の向上を目指した。



おめめとおてて展チラシ 左) inこどもはっち、右) in青森



展示風景 (inこどもはっち)



展示風景 (in青森)

2) 調査方法

展示する作品、そしてワークショップの内容は、幼児美術・造形表現の分野での課題となるもの、また現場の保育の中の造形表現・造形あそびで困ったことについて幅広く解決案を提示するものを目指した。

その上で、鑑賞者に、この作品展の効果や、共同の研究活動や研修の場としての作品展とワークショップの展示のためより望まれていることを明確にするために、アンケート調査を実施した。アンケートは造形作品とワークショップの展示を、見に来てくださった方に対象とし、1. 保育士・幼稚園教諭、2. 展示を観に来た子ども保護者や関係者、3. 保育士養成校の学生、4. その他 保育士養成校の学生とカテゴリー分けをしてそれぞれの造形あそびについての困ったことや悩みについて質問をした。次に、今回の作品展の鑑賞とワークショップの鑑賞・体験により得た気づきや参考になった点について質問した。そして、それらを比較し保育の現場や家庭で求められる共同の研究活動や研修の場としての作品展とワークショップの展示のあり方を再確認する。そして、実施までの過程とアンケート結果の考察から次の課題を探る。

3) ワークショップのねらい

おめめとおてて展では、作品展示の他に、inこどもはっち（八戸ポータルミュージアムはっち）では3つ、in青森（青森県立美術館 コミュニティギャラリー）では4つ、計7つのワークショップとin青森ではプレーパークを実施した。それぞれの概要とねらいについて下記にまとめる。

①おめめとおてて展inこどもはっち（場所：八戸ポータルミュージアムはっち）

ワークショップ1

「サララップを研究、魔法の色の川を作ろう！」

・概要：透明、キラキラのサララップで遊びを考えよう。包んで挟んで、包まって、身近な素材で遊びつくそう。

・実施：立崎博則（青森中央短期大学幼児保育学科）

・ねらい：サララップの上に絵の具を乗せサララップを重ね次は折り紙をちぎって乗せサラン

ラップを重ねていきカラフルなサランラップの川を作る活動

材料を乗せてサランラップを重ねていだけなので基本的には年少児から遊べる。乗せる材料は指定しているが、配置の仕方は子ども達の自由となる。家庭にもある身近な材料の紹介から始まり、グループでの制作で指定された材料で大きな川を作った後に、今までの材料から好きな物を選び個人個人で小さな川を作るという展開を想定している。サランラップに乗せる素材は、1回目は、ペン、折り紙（ちぎる）、絵の具、2回目は毛糸（はさみ）、セロファン（はさみ）、100均素材と段階を経て子ども達に提示されるようにしている。完成作品は長い川の状態です壁に貼ることで、その大きさを実感できるよう展示する。

ワークショップ2

「おひとりさまテントを作ろう」

・概要：いつ何がおこるかわからないから…、新聞紙やチラシなどの身近な紙素材で、自分だけのテントをつくろう。

・実施：木戸永二（青森明の星短期大学子ども福祉未来学科）

・ねらい：新聞紙を丸めて棒を作り、その棒を組み合わせて一人用の簡易テントを作る内容である。組み立て後自由に装飾し、表札を付けて完成となる。新聞紙で棒を作るのは定番の素材遊びであるが、そこから立体へと発展している活動を個人的に見たことが無かった。遊びから素材作りへ、新たな遊びへとという発見をしてもらいたいというのが活動のねらいである。

ワークショップ3

「しろ☆シロ☆shiro☆いろんな白で基地づくり」

・概要：いろんな白い素材を使って「モノの白」と「色彩の白」を探求しながら、みんなで基地を作ろう。

・実施：佐貫巧（八戸学院大学短期大学部幼児保育学科）

・ねらい：白と言う色を意識することで新しい発見があったり、さらに白で統一された色の中で子ども達はより形に注目し白い形で楽しめます。

②おめめとおてて展in青森（場所：青森県立美術館コミュニティギャラリー）

ワークショップ4

「文字から出てくる本のムシ☆」

・概要 捨てられてしまう古書を使って、文字から出てくる形を描いたり！切ったり！折ったり！読むだけじゃない本のいろいろな形を楽しもう♪

・講師 佐貫巧（八戸学院短期大学部幼児保育学科）

・ねらい：本は読むものと言ういつもの感覚から離れ、本という形のキャンパスの上で様々なアイディアで遊ぼう。

ワークショップ5

「ありがとうの形～気持ちをアートにしよう～」

・概要：スチレンボードでカラフルなメダル、ペットボトルや廃材でありがとうのトロフィーを作って、感謝の気持ちを形にします。

・実施：立崎博則（青森中央短期大学幼児保育学科）

・ねらい：ペットボトルを切って、フタをいろんなところにグリューガンで接着したペットボトルブロックを使って遊ぼうという主旨。導入で子ども達に賞状を渡しモノをあげて感謝を示すというテーマを理解する必要がある為、年長児程度を対象とする。ペットボトルブロックを組み立てる段階から、組み立てたトロフィーを装飾していく段階へと活動を展開する。最後にトロフィーの発表&鑑賞会を行い、誰に感謝の気持ちを伝えたいか発表する機会を設ける。

ワークショップ6

「学生によるワークショップ！サランラップで魔法の色の川を作ろう」

・概要：透明、キラキラのサランラップで遊びを考えよう。包んで挟んで身近な素材で遊びつくそう。

・実施：青森中央短期大学幼児保育学1年生4名

・ねらい：基本的には「サランラップで魔法の川作ろう」と同じねらいとなる。学生への実践経験としての教育的効果も期待する。

ワークショップ7

「夢のカラフル☆エアドーム☆」

・概要：いろいろな色のビニールを貼り合わせて、エアドームをつくろう♪入ることが出来るカラフルな世界はどんな景色かな？

・実施：佐貫巧（八戸学院短期大学部幼児保育学科）

・ねらい：子ども達はビニールを貼り合わせてたり、ビニールにお絵描きしたりという平面の上での作業をしていき、最後に中に送風機で空気を送り、一気に膨らませると今まで平面として意識していたものが立体になり、子ども達はその驚きの楽しい空間の中で様々な刺激を受け取ります。

プレーパーク ～なんでも作ろうコーナー～

・概要：身近な素材、色々な作る道具をたくさん揃えています。どなたでも、なんでも自由に作ってみましょう。楽しく安全であれば、わいわい作っても、じっくり作っても構いません。

・お手伝い：木戸永二（青森明の星短期大学子ども福祉未来学科）

・ねらい：空間内に様々な道具と素材を配置し、子どもたちに自由に製作及び展示を楽しんでもらうための空間を設定した。



ワークショップの様子 左) WS6、真ん中) WS7、右) プレーパーク

4) アンケートの質問と回答項目

アンケートは、造形遊びでの悩みとおめめとおてて展を見て/参加して参考になったことを同じ13項目を5段階で評価してもらう。分類するために、「保育者」、「保護者」、「養成校学生」、「その他」から当てはまるものを選んでもらい4つのグループに分ける。そのほか、参加したWSを選んでもらい分類を試みたが、数にばらつきがあり有効な数値とは言えなかったため、WSでの分類は諦めた。

アンケートの質問と回答項目は、島田（2016）が造形活動に関する調査のための質問紙の問い「実際に造形活動をするとき、心がけていることはどのようなことですか?」と「造形活動を設定するとき、重視することは何ですか?」において設定された選択肢を参考にし、アンケートの質問を問1「下記の造形表現や造形活動で困っていることについて、どれくらい当てはまるか該当する番号を丸で囲んでください。」と問2「本展示おめめとおてて展-おめめちゃんとおててくんのごんぼホリデーの作品展示や参加したまたは鑑賞したワークショップについて、下記の項目についてどの程度、ヒントや参考になったか当てはまるか該当する番号を丸で囲んでください。」の二つを設定した。そして、それぞれの調査項目を1. 年齢にあったあそびか、2. 個人差について考慮した援助ができていないか、3. 子どもの興味関心にあっているか、4. 活動の内容やねらいについて、5. 自由度の設定は適切か、6. 導入・動機付けはできているか、7. 導入、制作、まとめまでの時間配分は適切か、8. 材料の選択について、9. 道具・材料の教え方、10. 制作する環境は整っているか、11. 作品の展示に工夫があるか、12. 子どもの制作への声かけ、13. 子どもの作品の評価、の13項目設定した。

また、回答は問1は、すごく困っている、少し困っている、困っていない、ほとんど困っていない、まったく困っていない、問2は、すごく参考になった、少し参考になった、どちらでもない、あまり参考になっていない、まったく参考になっていない、と5段階で評価してもらった。

5) 倫理的配慮

アンケートは展示を見に来ていただいた方の中からランダムにお願いし書いていただいたものをその場で回収する形で行われた。これらについて回答データは全て統計的に処理し、個人が特定できない形で研究調査結果の発表を行う事を書面で伝え、アンケート用紙の提出を持って調査協力への同意を判断させていただいた。また、この調査は、青森中央短期大学研究活動推進委員会倫理審査会の承認を得て実施している。

第3章 アンケート集計

1) 集計方法と分類

おめめとおてて展は、2018年10月7日に八戸はっちで、また11月17、18日に青森県立美術館でそれぞれ実施された。展示期間中にアンケート調査は実施回収され八戸はっちでは36枚、青森県立美術館では36枚の計72枚回収され、有効回答は51件だった。

	八戸	青森	合計
回答数	36	36	72
有効回答	26	25	51

	八戸	青森	合計
1.保育士・幼稚園教諭	4	2	6(12%)
2.保護者	9	4	13(25%)
3.養成校学生	12	12	24(47%)
4.その他	1	7	8(16%)

(図1) 回答数と分類

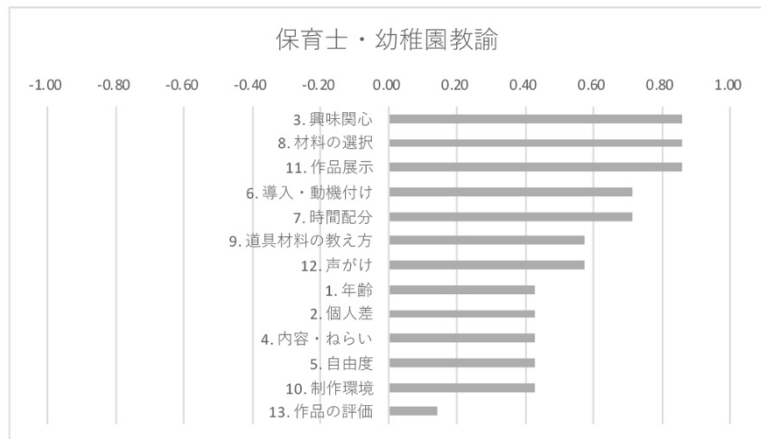
また、アンケートでははじめに1. 保育士・幼稚園教諭、2. 保護者、3. 養成校学生、4. その他の項目から当てはまるものを選んでもらい、分類をした。集計結果、1. 保育士・幼稚園教諭は6回答で全体の12%、2. 保護者は13回答で全体の25%、3. 養成校学生は24回答で全体の47%、4. その他は8回答で全体の16%となった。

2) 集計結果1「困っていること」

アンケートでは、次に問1として、造形表現や造形活動で困っていることについて、1. 年齢にあったあそびか、2. 個人差について考慮した援助ができていないか、3. 子どもの興味関心にあっているか、4. 活動の内容やねらいについて、5. 自由度の設定は適切か、6. 導入・動機付けはできているか、7. 導入、制作、まとめまでの時間配分は適切か、8. 材料の選択について、9. 道具・材料の教え方、10. 制作する環境は整っているか、11. 作品の展示に工夫があるか、12. 子どもの制作への声かけ、13. 子どもの作品の評価の13項目で5段階（すごく困っている、少し困っている、困っていない、ほとんど困っていない、まったく困っていない）の評価をしてもらった。集計時、すごく困っているを2点、少し困っているを1点、困っていないを0点、ほとんど困っていないを-1点、まったく困っていないを-2点として点数化し、1. 保育士・幼稚園教諭、2. 保護者、3. 養成校学生、4. その他でそれぞれ平均点を出した。そして、どの項目がどのグループで高得点

(高得点ほど困っている) か図で表した。

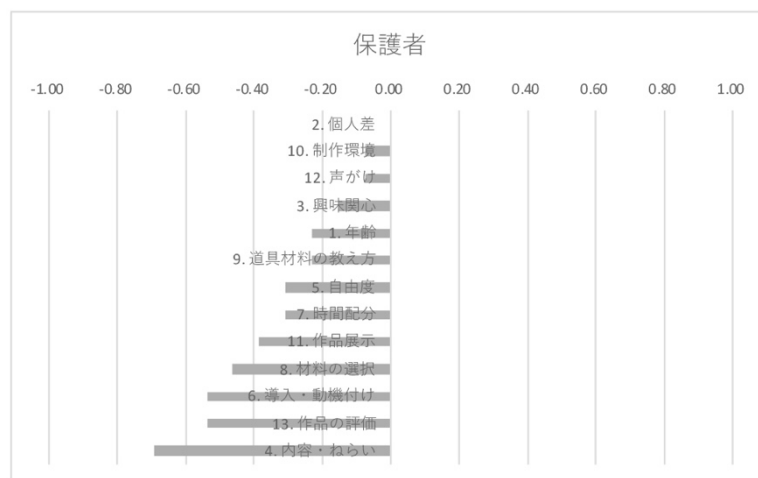
分類	保育士・幼稚園教諭
3. 興味関心	0.86
8. 材料の選択	0.86
11. 作品展示	0.86
6. 導入・動機付け	0.71
7. 時間配分	0.71
9. 道具材料の教え方	0.57
12. 声かけ	0.57
1. 年齢	0.43
2. 個人差	0.43
4. 内容・ねらい	0.43
5. 自由度	0.43
10. 制作環境	0.43
13. 作品の評価	0.14



(図2 困っていること 保育士・幼稚園教諭)

まずはじめに、(図2 困っていること 保育士・幼稚園教諭) から見ていきたい。保育士・幼稚園教諭のグループでは、3. 子どもの興味関心にあっているか、8. 材料の選択について、11. 作品の展示に工夫があるかが高得点となり点数も0.86と上から二番目の少し困っているに1点に近くなっている。また、続いて、6. 導入・動機付けはできているか、7. 導入、制作、まとめまでの時間配分は適切かという項目で、保育士・幼稚園教諭のグループが困っていると点数をつけたことがわかる。

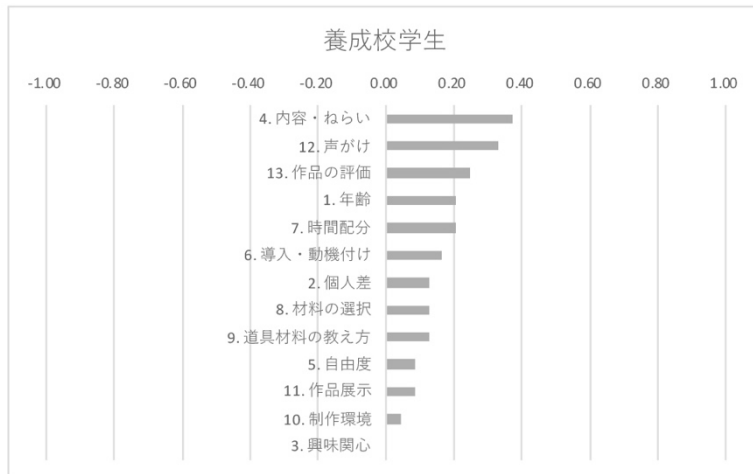
分類	保護者
2. 個人差	0.00
10. 制作環境	-0.08
12. 声かけ	-0.08
3. 興味関心	-0.15
1. 年齢	-0.23
9. 道具材料の教え方	-0.23
5. 自由度	-0.31
7. 時間配分	-0.31
11. 作品展示	-0.38
8. 材料の選択	-0.46
6. 導入・動機付け	-0.54
13. 作品の評価	-0.54
4. 内容・ねらい	-0.69



(図3 困っていること 保護者)

次に(図3 困っていること 保護者)を見ると、2. 個人差について考慮した援助ができているかが一番点数が高く、続いて10. 制作する環境は整っているか、12. 子どもの制作への声かけが高得点となっている。しかし、どの項目も点数は0以下となっており、困っている状態ではないことがわかる。

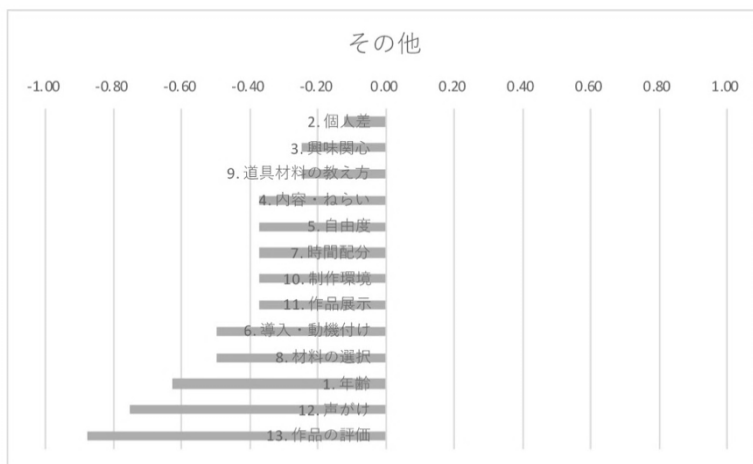
分類	養成校学生
4. 内容・ねらい	0.38
12. 声かけ	0.33
13. 作品の評価	0.25
1. 年齢	0.21
7. 時間配分	0.21
6. 導入・動機付け	0.17
2. 個人差	0.13
8. 材料の選択	0.13
9. 道具材料の教え方	0.13
5. 自由度	0.08
11. 作品展示	0.08
10. 制作環境	0.04
3. 興味関心	0.00



(図4 困っていること 養成校学生)

3つ目に(図4 困っていること 養成校学生)を見ていきたい。養成校学生のグループでは、4. 活動の内容やねらいについて、12. 子どもの制作への声かけ、13. 子どもの作品の評価が点数が高くなっている。また、点数自体も全ての点数が0以上となり、困っている状態であることがわかる。

分類	その他
2. 個人差	-0.13
3. 興味関心	-0.25
9. 道具材料の教え方	-0.25
4. 内容・ねらい	-0.38
5. 自由度	-0.38
7. 時間配分	-0.38
10. 制作環境	-0.38
11. 作品展示	-0.38
6. 導入・動機付け	-0.50
8. 材料の選択	-0.50
1. 年齢	-0.63
12. 声かけ	-0.75
13. 作品の評価	-0.88



(図5 困っていること その他)

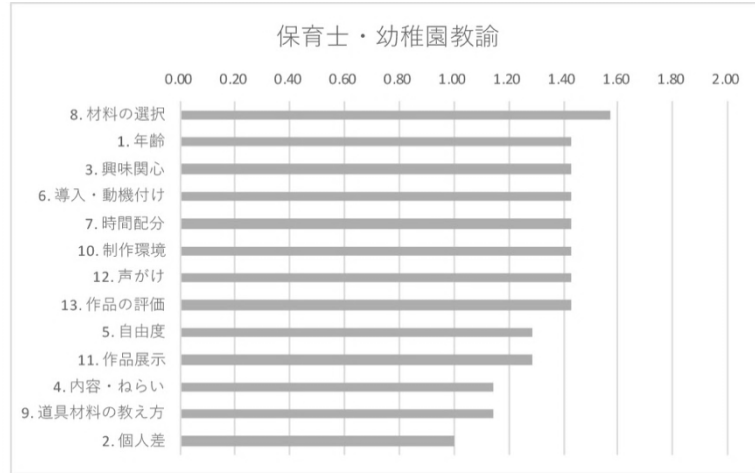
最後に(図5 困っていること その他)を見ると、上記3つのグループに当てはまらない回答者は、2. 個人差について考慮した援助ができていないか、3. 子どもの興味関心にあっているか、9. 道具・材料の教え方の3つが点数上位と言えるが、どの項目も0よりも低く困っている状態ではないと言える。

3) 集計結果2「参考になったこと」

アンケートは、続いて問2として、本展示の作品やワークショップについて、どの程度、ヒントや参考になったか問1と同じ13項目を5段階(すごく参考になった、少し参考になった、どちらでもない、あまり参考になっていない、まったく参考になっていない)で評価してもらった。集計時、すご

く参考になったを2点、少し参考になったを1点、どちらでもないを0点、あまり参考になっていないを-1点、まったく参考になっていないを-2点として点数化し、1. 保育士・幼稚園教諭、2. 保護者、3. 養成校学生、4. その他でそれぞれ平均点を出した。そして、どの項目がどのグループで高得点（高得点ほど参考になった）か図で表した。

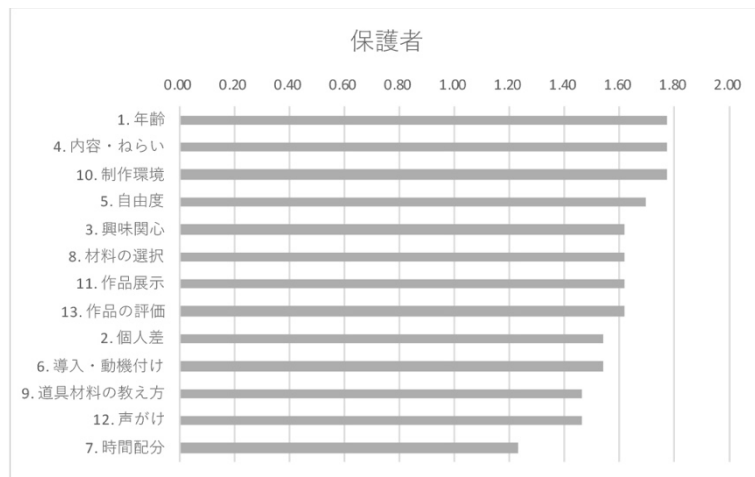
分類	保育士・幼稚園教諭
8. 材料の選択	1.57
1. 年齢	1.43
3. 興味関心	1.43
6. 導入・動機付け	1.43
7. 時間配分	1.43
10. 制作環境	1.43
12. 声かけ	1.43
13. 作品の評価	1.43
5. 自由度	1.29
11. 作品展示	1.29
4. 内容・ねらい	1.14
9. 道具材料の教え方	1.14
2. 個人差	1.00



(図6 参考になったこと 保育士・幼稚園教諭)

まずはじめに、(図6 参考になったこと 保育士・幼稚園教諭) から見ていきたい。保育士・幼稚園教諭のグループでは、8. 材料の選択についても点数が高く点数自体も1.50以上となっている。続いて、1. 年齢にあったあそびか、3. 子どもの興味関心にあっているか、6. 導入・動機付けはできているか、7. 導入、制作、まとめまでの時間配分は適切か、10. 制作する環境は整っているか、12. 子どもの制作への声かけ、13. 子どもの作品の評価が同点となっている。

分類	保護者
1. 年齢	1.77
4. 内容・ねらい	1.77
10. 制作環境	1.77
5. 自由度	1.69
3. 興味関心	1.62
8. 材料の選択	1.62
11. 作品展示	1.62
13. 作品の評価	1.62
2. 個人差	1.54
6. 導入・動機付け	1.54
9. 道具材料の教え方	1.46
12. 声かけ	1.46
7. 時間配分	1.23

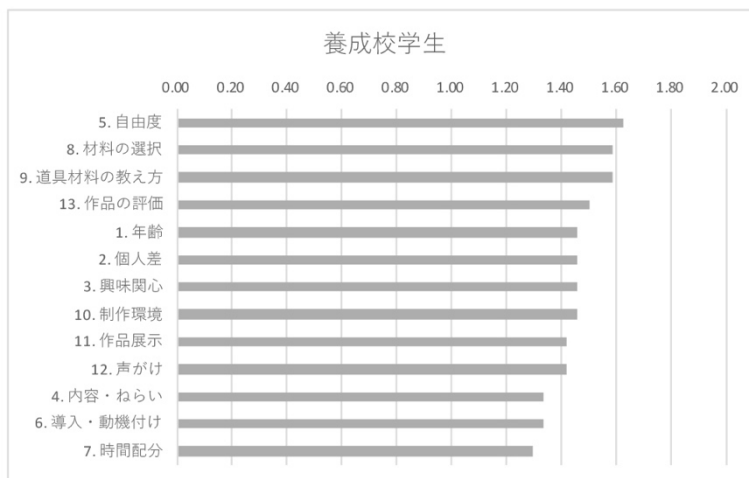


(図7 参考になったこと 保護者)

次に(図7 参考になったこと 保護者)を見ると、保護者のグループでは、1. 年齢にあったあそびか、4. 活動の内容やねらいについて、10. 制作する環境は整っているかが1.77で一番高い点数となっている。また、5. 自由度の設定は適切か、3. 子どもの興味関心にあっているか、8. 材料の選択について、11. 作品の展示に工夫があるか、13. 子どもの作品の評価、2. 個人差について考慮した援助ができていないか、6. 導入・動機付けはできているかまでが1.50よりも高い点数となり、

他のグループよりも参考になったと回答している。

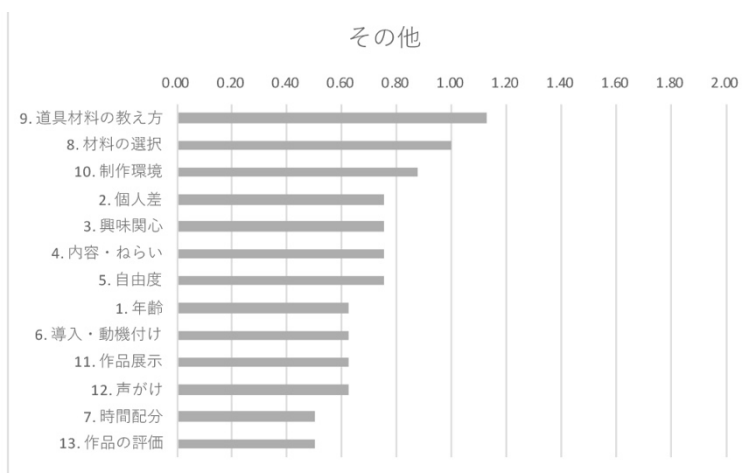
分類	養成校学生
5. 自由度	1.63
8. 材料の選択	1.58
9. 道具材料の教え方	1.58
13. 作品の評価	1.50
1. 年齢	1.46
2. 個人差	1.46
3. 興味関心	1.46
10. 制作環境	1.46
11. 作品展示	1.42
12. 声かけ	1.42
4. 内容・ねらい	1.33
6. 導入・動機付け	1.33
7. 時間配分	1.29



(図8 参考になったこと 養成校学生)

3つ目に(図8 参考になったこと 養成校学生)を見ると、養成校学生のグループでは5. 自由度の設定は適切かが一番高得点となり、続いて、8. 材料の選択について、9. 道具・材料の教え方、13. 子どもの作品の評価が1.50以上の点数となっている

分類	その他
9. 道具材料の教え方	1.13
8. 材料の選択	1.00
10. 制作環境	0.88
2. 個人差	0.75
3. 興味関心	0.75
4. 内容・ねらい	0.75
5. 自由度	0.75
1. 年齢	0.63
6. 導入・動機付け	0.63
11. 作品展示	0.63
12. 声かけ	0.63
7. 時間配分	0.50
13. 作品の評価	0.50



(図9 参考になったこと その他)

最後に、(図9 参考になったこと その他)見ると上記3つのグループに当てはまらない回答者は、9. 道具・材料の教え方と8. 材料の選択についてが1.0以上の点数で高得点となっている。しかし、他のグループと比べて、点数は低く参考になっている状態とは言い難い。

第4章 考察と今後の課題

1) 考察1 「困っていること」

図2～図5までのアンケート結果で4つのグループが造形表現や造形活動でどのように困っているのかがあげられた。それらを比較して見ていくといくつかの傾向が見える。一つ目は保育士・幼稚園教諭と養成校学生は困っている点数は高めだったが、保護者やその他のグループは困っている状態で

はなかった。しかし、これは「造形表現や造形活動で困っていること」という、表現という専門的なイメージを持たせるような質問内容であったため、評価がしづらかったとも考えられる。また、点数が比較的高かった項目もは2. 個人差について考慮した援助ができていないか、10. 制作する環境は整っているか、12. 子どもの制作への声かけなど、活動内容自体ではなく、子ども自身のことや制作環境やどのように接するべきかなどがあげられた。以上のことから、家では保護者が主体となり活動を設定して制作する遊びではなく、道具や材料など環境が主となるような遊びが想像され、その中で保護者は困ってはいない状態ではないと考えられる。これに対して保育士・幼稚園教諭は、8. 材料の選択や11. 作品展示などより造形表現活動の材料や作品という材料という物や作品という物をどう扱うかで困っている。より保育者が主となる活動の中での困った点であると考えられる。また、養成校の学生は、声かけや内容・ねらいなど、実習での経験が反映される結果となっていると予想できる。以上のように、困っていることを保育士・幼稚園教諭と養成校学生というグループと保護者というグループで比べると、大きく差があることが確認できる。まずは、保育士・幼稚園教諭と養成校学生が困っていて、保護者は困っていないという点。次にその評価内容と日常の保育や生活の場を考えた時に、保育士・幼稚園教諭と養成校学生は園の中で保育者主導の活動の悩みがアンケート結果として表れ、保護者は家の中で子ども主導の遊びでの悩みが結果として表れたという点である。このことから、保育者と保護者どちらも対象とした作品展やワークショップの場合はこの二つの傾向への対応したものであることが望ましいと言える。

2) 考察2「参考になったこと」

次に図2～図5までのアンケート結果で、4つのグループが今回の展示を鑑賞したり参加することでどのような項目が参考になったのかがあげられた。それらを比較して見ていくといくつかの傾向が見える。一つ目は保育士・幼稚園教諭と養成校学生は、日々の保育での活動や実習経験などからより実践的な8. 材料の選択についてや1. 年齢にあったあそびかまた3. 子どもの興味関心にあっているかという項目で参考になったと答えている。本展示では、身近な素材のいつもと違う遊び方を提案したワークショップや、文字や色への興味に注目したワークショップ、また年少児を対象にしたワークショップ、年長児を対象にしたワークショップと様々な種類のワークショップを多数実施し複数を参加・鑑賞できるように実施された。これらのワークショップのねらいが直接届いたのが保育士・幼稚園教諭と養成校学生の2つのグループだと考えることができる。二つめに、保護者のグループは、前問dでは困っていないと回答していたが、この問いでは4つのグループの中で一番参考になったと点数を高く回答している。項目は、年齢、内容・ねらい、制作環境と環境設定と活動設定に関わるような広い回答であり、造形遊びで何が必要なのか、考えるきっかけになったのではないかと予想できる。以上のように本展示は、保育士・幼稚園教諭、また養成校学生という保育関係のグループには、ワークショップがねらい通りに作用し、その上で保護者には、造形表現を考えるきっかけになったと言える。

3) 今回の展示の自己評価と今後の課題

本展示は、アンケートの問い参考になったことの結果を見る限り、どのグループからも参考になっ

たと高い評価をいただいた。造形表現を考える場としての作品展というテーマで計画実施した展示の初年度として満足いくものであったと言える。アンケート結果から考察するように、保育関係の方には、より実践的な材料や内容などのワークショップアイデアを刺激する作品展・ワークショップが求められ、保護者には、子ども達が楽しいのはもちろん、造形表現では親はどんなことを考えればいいのか考えるきっかけとなる作品展・ワークショップが提案されるべきだろう。このように多様なニーズに対応する為にも今回のような養成校1校での単独の開催ではなく3つの学校が互いに刺激し合い学び合いの中で実施された展示に意味があると考えられる。また、今後の課題として、保育士・幼稚園教諭などの保育関係の方が想定よりも集客できなかった。作品展という展示形態であれば保護者は集まりやすいが、保育関係者には難しいかもしれない。保育士養成校であれば大学にある出前講座などで行う出張ワークショップなどがこの代わりの役割となり得ると感じる。また、アンケートでは最後に自由記述での展示全体への感想を求める欄を用意した。その感想の中に「初めてみる活動ばかりでとても楽しかった。現場でやってみたい。」や「家でも作って遊んで見ます。」といった帰ってからも真似してやってみたいという感想と、「家ではできない体験をできて楽しそうでした。」という家ではできない特別な体験という感想の2種類が並んで回答された。アートワークショップだからこそ体験できる部分と帰って自分でもやってみたいと思える部分の両方が体験できる展示がこれからも求められていくだろう。

(参考文献)

- ・島田 由紀子：「造形活動に関する保育者の意識 -保育系学生との比較検討」、和洋女子大学紀要第56集 85-97、(2016.03)
- ・隅 敦「図画工作科に対する教科観の相違と教員養成の果たす役割 -20歳代と50歳代の現職教員対象の聞き取り調査をもとに-」美術教育学(美術科教育学会誌),第36号 223-238、(2015.3)

